

葛飾区史編さんだより Vol.13

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 12 月 20 日 (土) 午後 2 時から、新小岩地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、新小岩にまつわる様々なお話を伺うことが出来ました。



巽橋

平和橋通りと蔵前通りの交差点としてよく知られている巽橋ですが、よくこの名前の由来についてご質問を頂くことがあります。「巽」というのは東南の方角をさします。江戸深川の芸者衆を巽(辰巳)芸者と呼ぶのも「江戸の東南の芸者」ということですが、では新小岩の巽橋はなにを中心にして「巽」なのでしょう。

新小岩地区の「伺う会」では、この疑問に明快に答えてくださった方がいました。明治 2 年(1869)成立した小菅県の県庁が置かれた小菅御殿(現在は小菅拘置所の敷地になっている)から見た方角を言っているのだそうです。

小菅県は明治 4 年に品川県とともに東京府に合併した短い間存在した県です。その小菅県を地域の中心と考える見方が現在もおなじみの橋の名前で残っているというたいへん興味深いお話でした。

庭

新小岩地区は、昭和 40 年まで下小松町と呼ばれていました。江戸時代に出された新編武蔵風土記稿には下小松村の家数が記されていますがそれによるとわずかに七十軒しかない集落であったことがわかります。大正時代終わりころから関東大震災の被災者が移住してくるようになり、次第に都市化が始まります。それに対応するように昭和 3 年には新小岩駅が開業してますます発展するようになりました。当時鉄道がなかった現在の江戸川区域・浦安市とはバスで結ばれ、盛り場としても急成長するようになりました。江戸時代の下小松村は現在江戸川区と葛飾区の境になっている境川親水公園付近に家が集まっていて、ほとんどが農業を営んでいました。昭和 40 年頃はこれらの農家では蓮根栽培、亀戸大根などの栽培を行い、東京都心の市場へ出荷していきました。また、お正月のしめ飾り作りが盛んで、とくに玉飾りと呼ばれる玄関先に飾るしめ飾りが得意でした。

この下小松村の集落は「庭」というまとまりがあって、冠婚葬祭や祭りのときに付き合っていました。「庭」とは一般的には小字、小名と呼ばれるところが多く、葛飾区内ではズシ、クミなどというところもあります。概して葛飾区の南側に庭というところが多く、北側にはズシと呼ぶところが多い傾向にあります。

下小松の庭は上の庭と下の庭と呼ばれていました。それぞれ神社があって、下小松村の鎮守である天祖神社とは別に地域の守り神とされていました。また、初午の日には下小松の子供たちがそれぞれの庭にある八坂神社、稲荷神社におこもりをして、各家からお賽銭を集めて回るという楽しい行事がありました。

また、十五夜の日にも子供たちが集まって各家の縁側に飾られているお供え物を盗んで歩く「団子盗み」という行事もありました。この日ばかりは団子を盗んでいいという暗黙の取り決めがあったのです。

祭りや年中行事が暮らしの中の重要なリズムであったころ、庭はそうした行事を執行するための基本的な集団でした。

新小岩駅



昭和 20 年ごろの新小岩駅

米軍機墜落事件



昭和 31 年(1956)2 月 3 日、神奈川県厚木基地を発進した米軍機が墜落する事件が起きました。今回の「伺う会」でもその模様を見ていた人が大勢おられました。

午前 11 時頃上空で突然エンジンが停止した米軍機はキリモチ状になって当時の下小松町の民家に墜落しました。墜落したのは新小岩北口の 100 メートルほどの地点で、付近には商店街もあり、一歩間違えば大惨事になるところでした。

この事故ではパイロットが死亡したほか、4 人の民間人が重軽傷を負いました。

新小岩駅は昭和3年に開業しました。すでに大正 15 年には新小岩信号所が設けられ、それが同じ年に新小岩操車場となり、昭和 3 年に駅に昇格したものです。この新小岩駅の名前はもちろん隣接する小岩駅にちなんだものですが、新小岩という駅名に反対する人も多かったようです。

新小岩駅は江戸時代は下小松、上小松と呼ばれる集落であったことから、「下総小松」という駅名にしたいという意見が多くありました。「下総」としたのはすでに石川県に小松という駅があったことと、隅田川以东を下総国と考える風潮があいまったものだとされています。「下総」の真偽はいまのところはっきりしませんが、「小松」は駅が置か

れている場所が、下小松と上小松双方に近いということに由来しているようです。

この駅名の決定についてはまったく逆の、「下総小松」もしくは「小松」に変更するよう、下小松の人たち 8 名で陳情嘆願しましたが、すでに切符の印刷や駅名表示板が完成しておりこの変更のために多額の費用(米 1 万俵に換算されるともいう)が掛かるとのことで見送られたのだそうです。

2013 年の一日平均の乗車客が 7 万人を超える新小岩駅ですが開業当時はほとんど乗客がいないうさみしい駅だったということです。昭和 19 年(1944)那須アルミ、理研鋼材平井工場(のちの大同製鋼・大同特殊鋼)などへの通勤の便を考慮してあらたに北口が設けられました。葛飾区の南の玄関口として現在も発展を続けています。



六万坪

新小岩駅北側、現在の新小岩公園と新小岩団地になっている一角は大正時代まで「六万坪」と呼ばれる湿地帯でした。この湿地は歴史的には中平井村の共有地でした。明治時代の初めころまでは中平井村ではこの共有地に生えるヨシを屋根材として販売し、利益を得ていました。

民家の屋根の大半が茅葺であった頃は非常に重要な土地でしたが次第に使われることが少なくなり荒れた状態になっていました。

この六万坪には昭和 13 年には那須アルミ、理研鋼材平井工場が出来て工業地帯となり葛飾区の発展のひとつの拠点となりました。